

令和 5 年度 研究報告書

不登校対策検討委員会委員たちの意識の違い

—不登校支援の調査を通して—

指導教員

藤中 隆久 教授

濱平 清志 シニア教授

塩津 昭弘 シニア教授

令和 4 年度入学

熊本大学大学院 教育学研究科

教職実践開発専攻 学校教育実践高度化コース

226-A9702 尾方晏奈

目次

第1章 問題の所在と研究の目的

- 第1節 不登校について・・・p.1
 - (1) 不登校児童生徒数の増加
 - (2) 不登校の要因
- 第2節 文部科学省の不登校児童生徒への支援の方針・・・p.2
 - (1) 不登校児童生徒への支援の在り方について
 - (2) COCOLO プランについて
- 第3節 熊本市の不登校児童生徒への支援の現状・・・p.3
 - (1) 不登校対策サポーター
 - (2) 熊本市教育委員会の不登校児童生徒への支援に対する考え方
- 第4節 研究の目的と方法・・・p.4

第2章 A 中学校の登校支援委員会（不登校対策検討委員会）の実態把握

- 第1節 A 中学校について・・・p.4
- 第2節 登校支援委員会（不登校対策検討委員会）の概要・・・p.4
 - (1) 会議資料と議事録
 - (2) 会議の流れ
- 第3節 筆者から見た登校支援委員会・・・p.6
 - (1) 1 時間目
 - (2) 2 時間目
 - (3) その他

第3章 登校支援委員会委員たちの考え方

- 第1節 社会的自立について・・・p.7
- 第2節 登校支援委員会の課題や現状について・・・p.9
- 第3節 別室について・・・p.11
 - (1) 別室の概要
 - (2) 別室の運営方針
 - (3) 別室を利用する生徒について
 - (4) 別室を利用する生徒、保護者の意見
 - (5) 登校支援委員会委員たちの考え

第4章 まとめ

- 第1節 登校支援委員会委員たちへのインタビュー結果・・・p.14
- 第2節 実践研究全体のまとめ・・・p.15

あとがき・・・p.17

巻末資料1 別室の写真・・・p.18

巻末資料2 アンケート結果・・・p.20

不登校対策検討委員会委員たちの意識の違い

—不登校支援の調査を通して—

令和4年度入学

熊本大学大学院 教育学研究科

教職実践開発専攻 学校教育実践高度化コース

226-A9702 尾方晏奈

報告書要旨

不登校の児童生徒数は、文部科学省の調査によれば平成24年度より増加傾向にある。このようなことから不登校は「誰にでも起こりうること」として、一部の児童生徒にのみ発生する問題ではなく一般的な問題として捉えられるようになった。一方において、不登校の児童生徒を受け入れる場所や、卒業後の将来を見据えた支援が求められるようになり、学校での教育相談体制の充実や、行政機関によるフリースクールやオンラインの学習支援など様々な取り組みが行われるようになってきている。

本研究では、不登校を課題としている中学校で実施されている不登校対策検討委員会の観察や委員たちへのインタビュー調査を通して、不登校や別室登校の生徒と実際に関わりを持つ委員たちが不登校生徒への支援についてどのように捉えているのかを調査し、項目ごとに委員たちの考えをまとめ、考察を述べる。特に、項目の一つである別室は学校ごとに運営方針や体制が異なるため、この学校の別室の様子や利用する生徒の姿などを調査し委員たちが日頃から見ている実際の別室の姿を明らかにしたうえで、委員たちの考えを整理する。

不登校対策検討委員会委員たちの不登校生徒への支援に対する考え方は異なっており、その結果、不登校生徒に対する具体的な対応の決定に繋がっていないと考えられる。以上のことから、不登校対策検討委員会にはそれぞれの委員たちの不登校生徒への支援に対する考え方や思いを話し合い、よりお互いを理解し合うことのできる時間を設ける必要があると感じられた。

【キーワード】 不登校 不登校対策検討委員会 別室

第1章 問題の所在と研究の目的

第1節 不登校について

(1) 不登校児童生徒数の増加

文部科学省の「令和4年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」によると、不登校数は全国の小中学校合計299,048人で過去最多となった。⁽¹⁾令和2年度の不登校数が小中学校合計196,127人であったことから、2年で約10万人増加しており不登校数は各段に上昇している。また、熊本市の令和4年度の長期欠席者は熊本市立の小中学校合計3,523人で、そのうち2,760人が不登校を原因とした長期欠席である。⁽²⁾

不登校数の増加は、熊本市だけでなく全国的に状況改善が見られない現象であり大きな生徒指導上の課題の一つである。

(2) 不登校の要因

不登校の児童生徒の増加に伴い、不登校の要因や背景も多様化している。児童生徒の本人に関わる問題、友達や教員に関わる問題、家庭に関わる問題など様々な要因が複雑に絡み合い、不登校という現象として現れている。コロナ禍による生活リズムの変化や人間関係の希薄化、保護者や周囲の人々の「不登校は悪いことではない」という不登校に対する認識の変化など、児童生徒を取り巻く社会の変化も不登校数の増加に繋がっていると考えられる。一方で、「なんとなく学校に行くことができない」といった要因が不明瞭な児童生徒も存在している。令和2年度の文部科学省の不登校の児童生徒へのアンケート調査によると、学校に行きづらいつと感じ始めた要因として、学校生活のいずれかがきっかけと回答した児童生徒は8割強、身体的な不調や生活リズム変調がきっかけと回答した児童生徒は4割強であった。一方で、2割強の児童生徒（小学生（26%）、中学生（23%））は、「きっかけが何か自分でもよくわからない」と回答している。⁽³⁾（図1、図2参照）

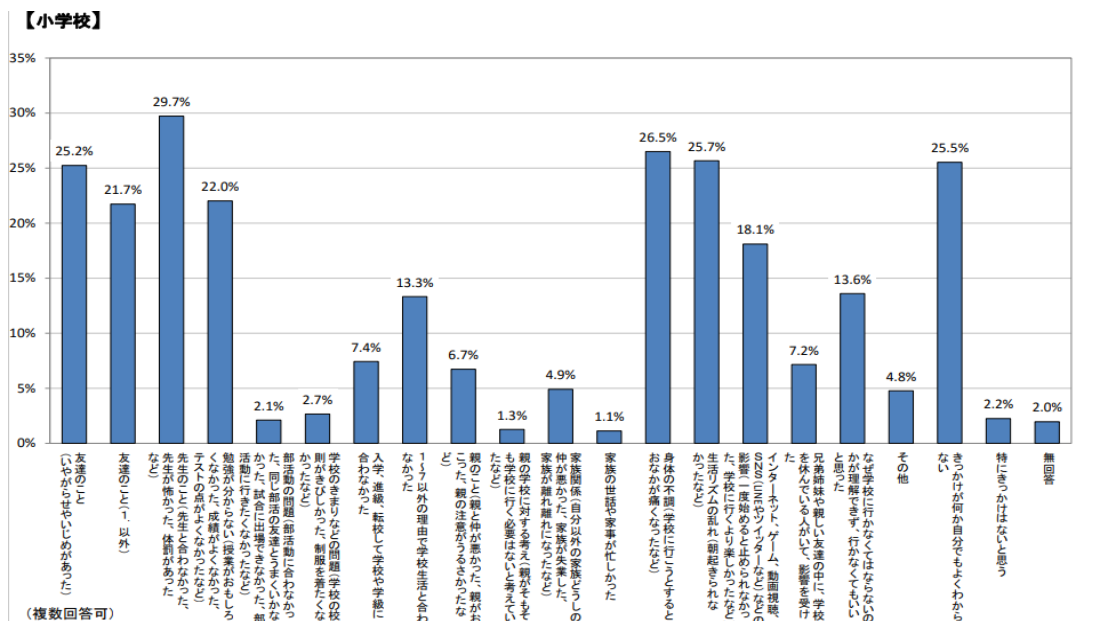


図1（文部科学省『令和2年度不登校児童生徒の実態調査結果の概要』p.5より引用）

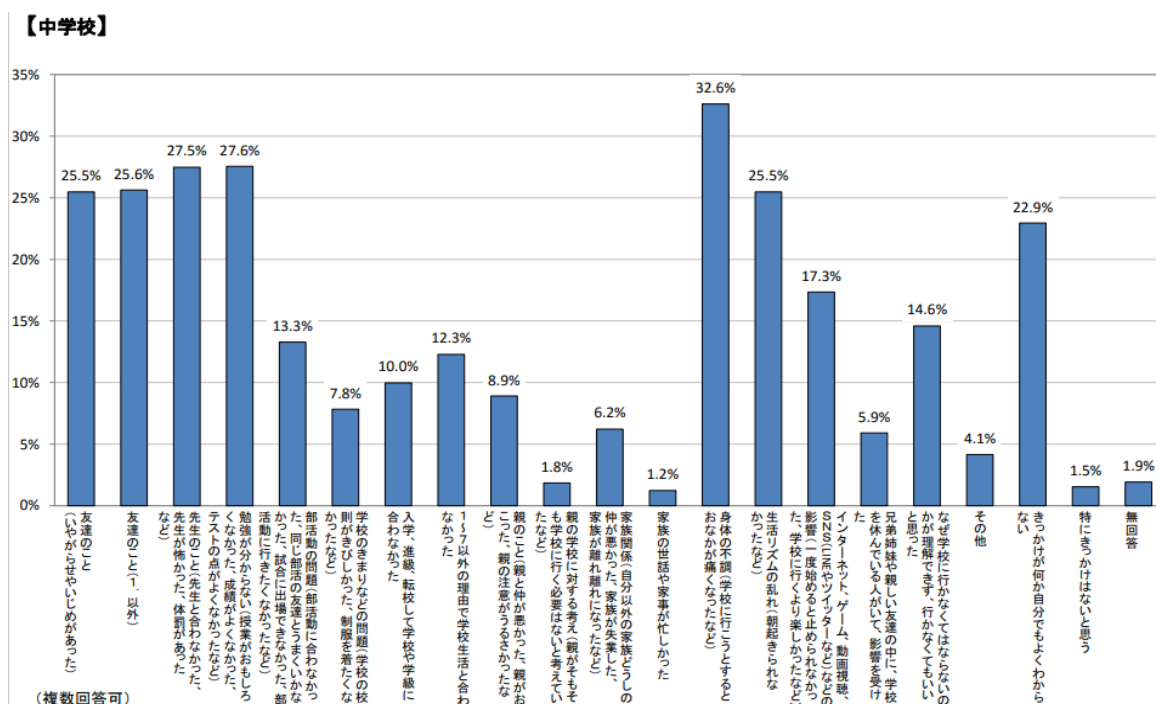


図2（文部科学省『令和2年度不登校児童生徒の実態調査結果の概要』p.6より引用）

また、同年度の文部科学省の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査」によると、学校側の回答として最も多い不登校の要因は「無気力・不安（小中学校合計46.9%）」であった。⁽⁴⁾

滝川（2005）はこのような児童生徒が増加していることについて過去の不登校の姿と比較し、「現在は些細な葛藤や躓きからたやすく不登校が起こる一方、不登校自体が激しい葛藤をもたらすことは少なくなり、深い心理葛藤に代わり、漠然とした学習意欲の低下や不安全感にうっすら覆われた輪郭のぼやけた不登校が目立つようになった。」と述べている⁽⁵⁾

第2節 文部科学省の不登校児童生徒への支援の方針

(1) 不登校児童生徒への支援の在り方について

不登校の支援について文部科学省は「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」（2019）において、以下のように言及している。⁽⁶⁾

不登校児童生徒への支援は、「学校に登校する」という結果のみを目標とするのではなく、児童生徒が自らの進路を主体的に捉えて、社会的に自立することを目指す必要があること。また、児童生徒によっては、不登校の時期が休養や自分を見つめ直す等の積極的な意味を持つことがある一方で、学業の遅れや進路選択上の不利益や社会的自立へのリスクが存在することに留意すること。

このように、文部科学省は不登校児童生徒への支援について学校復帰や教室復帰という分かりやすい変化のみを目標とするのではなく、将来の社会的自立に向けた多様な過程を本

人に合わせて設定することを重視している。

(2) COCOLO プランについて

令和 5 年には「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」（2019）で示された不登校児童生徒への支援に対する基本的な考え方に従い「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策（COCOLO プラン）」（2023）が発表された。このプランの目標の一つが「不登校の児童生徒全ての学びの場を確保し、学びたいと思った時に学べる環境を整える」であり、実現のため主な取り組みとして以下の 5 つが示されている。⁽⁷⁾

- ・ 不登校特例校の設置を促進
- ・ 校内教育支援センターの設置を促進
- ・ 教育支援センターの機能を強化
- ・ 高等学校等においても柔軟で質の高い学びを保障
- ・ 多様な学びの場、居場所を確保

校内教育支援センターとは児童生徒が自分のクラスに入りづらい時や気持ちを落ち着かせてリラックスしたい時に利用できる場所で、児童生徒のペースに合わせて相談をしたり学習のサポートを受けたりすることができる居場所の一つである。後述する別室も校内教育支援センターの一つである。

第 3 節 熊本市の不登校児童生徒への支援の現状

熊本市は不登校を誰にでも起こり得るものとして「学校に登校する」という結果のみを目標にするのではなく社会的自立を目指し、フレンドリーやフリースクール、ユアフレンド活動、不登校対策サポーターの配置等を実施している。⁽⁸⁾ また不登校について組織で対応していくことを目的として生徒指導部会の組織として不登校対策検討委員会を位置づけている。社会的自立を目標とする考え方は前述した文部科学省の不登校児童生徒への支援の目標に則したものとなっている。

(1) 不登校対策サポーター

不登校対策サポーターとは別室登校や不登校の児童生徒への対応を行うことを主な役割としており、そのほかにも家庭訪問で不登校の児童生徒との関わりを持つことや不登校対策委員会に参加し助言等を行う役割も持つ。

不登校対策サポーターは平成 28 年度に始まり、当初は小学校 6 校、中学校 3 校に配置されていた。今回対象としている A 中学校は初年度から再任用職員が配置されている中学校の一つである。今年度は 12 名が不登校対策サポーターとして市内の中学校 12 校に配置されている。熊本市教育委員会は、不登校対策サポーターの配置について不登校の児童生徒数が増加しているため不登校対策重点配置校に限らず市内の中学校 42 校全ての配置を目指しているが、配置対象としている再任用職員の希望者が少ないため実現が難しい状態となっている。

(2) 熊本市教育委員会の不登校児童生徒への支援に対する考え方

熊本市教育委員会は、フレンドリーやフレンドリーオンライン、フリースクール及び別室において「心の居場所づくり（安心できる居場所）×学習機会の保証（学ぶことができる場所の提供）」を重視している。熊本市教育委員会の不登校児童生徒への支援担当者に、不登校児童生徒への支援について話を伺ったところ「フレンドリーや別室は学習機会の保証はできるが学力の保証は難しい場所である。しかし、最も大切に考えていることは心の居場所づくりである。実際、不登校対策サポーターが常駐していることによって子どもたちは『来たら必ず先生がいてくれる』と感じ安心感を得ることができる。」と話している。これは忠井・本間（2006）が以下に述べる居場所の基本的な意義と一致している。⁽⁹⁾

彼らが新たな場に通うためのもっとも基本的な条件は、その場で自らの存在が脅かされることなく安心していられること、換言すれば、存在自体の価値がまるごと認められることが居場所づくりの根本になければならない。（中略）まさに、場への安心感や安全感こそが、存在をまるごと認められることの心理的な内実であり、居場所のもっとも基本的な意義なのである。

第4節 研究の目的と方法

熊本市内の中学校を対象に不登校に関する会議の様子の観察や、委員たちへのインタビューを行い、実際に不登校や別室登校の生徒と関わりを持つ委員たちが不登校及び別室登校の生徒や別室に対してどのような考えを持っているのか違いを明らかにする。また、委員たちへのインタビュー調査や別室の生徒との関わりを通して今後別室登校や不登校の生徒とどのように向き合っていくべきか、自分の考えを形成する。

第2章 A 中学校の登校支援委員会（不登校対策検討委員会）の実態把握

第1節 A 中学校について

A 中学校は不登校数の増加を課題としている学校であり、生徒指導困難校と一般的に考えられている中規模校である。熊本市で取り組みが始まった令和3年度より不登校対策重点配置校に指定されている。不登校出現率は令和4年度9.41%で、全国の中学校不登校出現率の平均約5%と比較しても不登校数が多い学校である。そのため、養護教諭の加配が行われ、別室にも不登校対策サポーターが配置されている。加えて、SSW拠点校でもあるためSC3名、SSW1名が配置されており不登校生徒への支援が手厚い学校である。

第2節 登校支援委員会（不登校対策検討委員会）の概要

A 中学校の不登校生徒への支援の特徴の一つが、「登校支援委員会」と呼ばれる不登校対策検討委員会である。当初は不登校対策検討委員会であったが、登校を支援するという思いから登校支援委員会と名称を変更している。この会議では全校生徒の中から欠席日数5日以上上の生徒について報告を行い、対応を検討している。平成30年度立ち上げから週に1回、

2 時間ずつ行われており、生徒指導部会とは別で不登校の生徒のための話し合いの時間が設けられている。登校支援委員会委員は以下の 12 名である。

- ・ 校長、教頭、主幹教諭、生徒指導主事
- ・ 養護助教諭
- ・ 不登校対策サポーター
- ・ SSW、SC（不定期の参加）
- ・ 各学年、特別支援学級の登校支援委員会担当者

(1) 会議資料と議事録

会議資料、議事録は、全教員が閲覧できるように会議の司会者である養護助教諭より毎週アップロードされている。会議資料は A4 5 枚程度の各学年、特別支援学級の欠席日数 5 日以上の生徒名と欠席日数を箇条書きにしたものと保健室から 4 枚程度のそれぞれの生徒のカウンセリングや来室時の様子を 300 字程度で記載した資料、別室から 2、3 枚程度の一週間の来室した時間と来室時の様子を写真と記載しコメントを記載した資料の 3 点である。

(2) 会議の流れ

会議の主な流れは 1 時間目に不登校、不登校傾向の生徒数の報告や各学年、特別支援学級、保健室、別室からの現状報告が行われる。2 時間目は各学年、特別支援学級の登校支援委員会担当者を除く 8 名で、1 時間目の報告の中で気になる生徒や別室運営などをその日に応じてテーマ設定がなされ話し合われている。時間配分や 4 時間目の内容は参加する委員や報告内容によって変化するが一例として、以下に某日の会議の流れを示す。

1 時間目

- ・ 不登校生徒・不登校傾向生徒の状況（3 分）

欠席日数 10 日～19 名の不登校予備、20 日～29 日の不登校傾向、30 日以上の不登校の三段階に分けて該当する生徒数の増減について報告があった。

- ・ 各学年より現状報告（15 分）

欠席日数 5 日以上の生徒 82 名（1 年 23 名 2 年 28 名 3 年 31 名）のうち 34 名（1 年 14 名 2 年 9 名 3 年 11 名）について一言ずつ報告した。

- ・ 特別支援学級からの報告（3 分）

欠席日数 5 日以上の生徒 7 名について一言ずつ報告があった。

- ・ 気になる生徒や質問など（5 分）

- ・ 保健室からの報告（10 分）

保健室を利用した生徒、カウンセリングを受けた生徒 8 名について資料を基に報告がなされた。

- ・ 別室からの報告（10 分）

別室を利用した生徒 11 名について資料を基に報告がなされた。

- ・ 総評（5 分）

2 時間目

・SSW からの報告（10 分）

SSW が関わった生徒 5 名について報告があった。

・フリートーク（40 分）

不登校傾向、不登校の生徒 7 名の支援について具体的に手立てが話し合われた。

第 3 節 筆者から見た登校支援委員会

(1) 1 時間目

各学年の報告する生徒数が多く個々の生徒に割く時間が足りないと感じた。各学年担当者が報告する時間は上記の流れにあるように 15 分程度で一つの学年につき 5 分程度である。20 名～30 名の生徒の一週間の様子や担任が感じていることを伝えることは難しく、情報量を絞って報告せざるをえないと感じた。しかしながら、それらを踏まえても各学年担当者からの情報提供は乏しいと感じた。生徒についての報告が「担任に話を聞けていないため分からない。」「担任に聞きましたが、以下の生徒は特に変化なしとのことでした。」といった理由で省略されることが多く、生徒の様子が具体的には見えてこなかった。また、生徒に関する質問が投げかけられた場合も同様に分からないと回答する場面も見られた。このため、担当者が各クラスの担任から情報を集めて報告する役割を担うことができず、情報量が不足していると感じた。ただ、二学期以降については、詳細が分からなかった場合は持ち帰り、翌週に報告されることが増えてきている。

また、一学期時点では気になる生徒がいないか司会に投げかけられた際に名前が挙がることは多くはなかった。SSW が 1 時間目に報告するなど報告の順番の前後によって時間を取ることができない場合もあったが、時間が設けられた際も生徒について質問が挙がらず、次の報告に移っていくこともあった。名前が挙がること自体が少なかったが、特に各学年担当者から他学年に対して質問する姿が見られず、管理職からの質問に各学年担当者が回答することがほとんどとなり一方通行のように感じた。このような様子から、他学年や自分の関わっている生徒以外への関心が薄いと感じた。ただ、二学期以降は気になる生徒の名前が挙がる機会が増加した。特に教頭、生徒指導主事からは、欠席数が増加している生徒の名前が挙がることが多くなり、現状や不登校の原因について把握し報告するように各学年担当者に指示する姿が見受けられた。これは、一学期を経て継続して欠席している生徒が固定化してきたことと継続して長期欠席している生徒と新規の不登校予備（欠席日数 10 日～19 日）、不登校傾向（欠席日数 20～29 日）の生徒の欠席日数の違いがはっきりとしてきたためであると考えられる。

(2) 2 時間目

2 時間目に参加する委員は、1 時間目に参加する委員のうち各学年、特別支援学級担当者を除く 8 名だが、実際に参加頻度が高いのは、教頭、主幹教諭、生徒指導主事、養護助教諭、不登校対策サポーター、SSW で実質 6 名体制となっている。個別の生徒について対応を検討すると聞いていたが、実際には個別の生徒についてだけでなく不登校に関わる様々な

ことを話す時間として機能しており、別室の運営や不登校生徒への支援のあり方などについて委員たちの考えが飛び交う様子がとても印象深かった。

(3) その他

登校支援委員会の議事録や会議資料は前述したように全教員が閲覧できるようになっているが、委員以外の教員については共有、活用されていないと感じた。議事録、会議資料は昨年度まで委員のみ閲覧ができるようになっていたが、今年度より全教員がタブレット上で閲覧できるように変更されている。しかしながら、委員以外の教員に話を伺ったところ「生徒指導部会の資料は見ているが登校支援委員会の資料はあまり見ていない。」「登校支援委員会の史料がタブレット上で閲覧できるようになっていると知らなかった。」と答えた教員がいた。また、委員の中にも、「2 時間目の四者会議の時間には何を話しているのか分からない。」と答えた教員がいた。議事録、会議資料を作成している養護助教諭に伺うと「議事録や会議資料に関して他の教員から質問されたことはない。」と話した。以上のことから、登校支援委員会の内容が議事録や担当者を通じて共有されていないと感じた。

第 3 章 登校支援委員会委員たちの考え方

半年間登校支援委員会に参加し、9 月に委員たちにインタビューを実施した。その中から委員の考え方が見られた項目を挙げる。また、第 3 節は別室について補足をしたうえでそれぞれの考え方を示す。

第 1 節 社会的自立について

社会的自立とはどのような状態を指すか。また、生徒を社会的自立に繋げるためにどのようなことが必要だと思うか。

〔校長〕

精神的自立が前提として、その上で大きな集団又は小さな集団でもどこかの集団に自分を置き生活していけるようになること。だから、フレンドリーやフレンドリーオンライン、別室も集団の 1 つで社会的自立の場所は学校だけではない。学校と同列のところに外部機関があり、どこで社会的自立に繋げていけるかが大事だ。

〔教頭〕

(社会で) 働き、集団の中で生活する上で必要な力を身に着けること。そのために、集団の中で生活できるようになることや自分の気持ちを適切に表現できるようになることが必要。この集団生活は学校で経験できることだ。だから、文科省の「学校復帰だけを目的とするのではなく社会的自立を目指す。」というのは、学校復帰が目的ではなく、まず学校に来てそして自立することだと解釈している。

〔主幹教諭〕

社会の中で自立した生活ができるようになること。精神的自立と経済的自立と同列に社会的自立がある。一時的な楽しさに引っ張られることなく将来や周囲のことを考えて自分のことを決定できるようになる必要がある。そして最終的に人と人とのコミュニケーション

が取れるようになるようになることが大切だと思う。そのためには学校で人と関わり失敗しながら学ばないといけない。

〔生徒指導主事〕

社会で生きていけるようになること。そのためにも学校は登校にこだわりながら学校の楽しさを発信していく必要があると思う。社会で自立できればいいから登校刺激をしなくてもいいわけではないと考えている。ただし、どうしても難しい生徒にはどうしていくかその生徒に合わせて最善を考える必要がある。

〔養護助教諭〕

自分で働いて自分でお金を得ること。そのためにコミュニケーション能力を身に着ける必要がある。学校では人との関わりや人と関わることの楽しさを学ぶことができる。だからこそスモールステップを踏んで教室にも戻り集団の中で過ごすのが最も社会的自立につながると考える。

〔不登校対策サポーター〕

社会の中で幸せな生活を送ることができるように生きる力を身に着けていくこと。(生きる力とは) 他者と円滑にコミュニケーションが取れるようになり、他者と支え合って生きて行けるようになること。そのために自分を大切にしながら、他者に自分の気持ちを適切に伝えられるようになることが必要だと思う。

〔各学年担当者①〕

孤立した状態ではない生活が身につけられて、社会に出た時に生徒が活動できるようになること。人と関わることや誰かとつながること、生活をコントロールすることなどはこれまで学校で培っていたが、学力をつけることにこだわらなければフレンドリーでもフリースクールでも人との関わりを持つことができるので良いと思う。

〔各学年担当者②〕

経済力を持って自分自身だけでも生活していけるようになること。そのために学校でできることは人と関わるスキルを身に着けさせること、基礎学力を身に着けさせること、年齢に応じて将来について考えさせることだ。学校で社会的自立に繋がられたら一番いいと思うが今はいろいろあるから親と本人が納得しているならフリースクールやフレンドリーを選択するのも致し方ないと思う。

〔S S W〕

ご飯を食べることや金銭管理ができることといった生理的欲求と安全欲求が満たされて整えられること。そのためには人とコミュニケーションが取れるようになったり誰かとつながったりすると社会的自立につながると思う。学校で生活のモデルを学び、生活を整えることもその一つ。ただし、学校以外でも生徒の力が伸びていくことができればそれで良いと思う。

(考察)

どの委員も社会的自立に関して人とのつながりやコミュニケーションという言葉を使用

していた。ただし、そのために大きな集団で生活することを必要とするかという点で考え方に違いが見られた。

生徒指導提要（2022）では社会的自立について「社会的自立は依存しないことや支援を受けないということではなく、適切に他者に依存したり、自らが必要な支援を求めたりしながら、社会の中で自己実現していくという意味である。」と述べている。したがって「傷ついた自己肯定感を回復する」、「コミュニケーション力やソーシャルスキルを身に付ける」、「人に上手に SOS を出せるようになる」ように支援することが不登校の児童生徒への支援の第一歩であると述べている。文部科学省の考え方に最も近いのは不登校対策サポーターに他ならない。

第 2 節 登校支援委員会の課題や現状について

登校支援委員会の課題や現状について感じていることや考えていることはあるか。

〔校長〕

課題は各学年の担当者が報告する情報量に差があること。だから、各学年、特別支援学級担当者にも 2 時間目に参加してもらい、どの生徒にスポットを当てて支援していくのかを話し合っていることを知ってほしい。そして心配な生徒はとにかく報告するようになってほしい。

〔教頭〕

課題は各学年担当者からの情報量が少ないこと。担当者はただ聞いたことを報告するのではなく、自分から情報を聞いていくことで当事者意識を持つようになってほしい。今後は担当者が役割を果たすことで生徒の詳しい情報を得た上で、生徒が不登校にならないように様々な人が支援していけるようにしていきたい。

〔主幹教諭〕

課題は不登校数が減らないこと。不登校数の減少など結果を示し効果があったと言えなければ SC や SSW、不登校対策サポーターといったマンパワーが削られてしまう。学校としてもサポートしようとしているが家庭の多様化や家庭内の問題も関係しているため中々難しいのも理由の一つだと思う。

A 中学校は他の学校と比較して不登校生徒への支援が手厚く一人ひとりを大事にしていると感じる。

〔生徒指導主事〕

何日も欠席している生徒が埋もれてしまわないようにしないといけない。担当者によって情報量の違いがあることも課題の一つだが、報告する生徒の数が多いのでそれぞれの生徒のことを細かく上げすぎても現状の把握が出来なくなってしまう。また、2 時間目に決まったことが担任に伝わっているのか分かりづらいのも課題の一つだと思う。

〔養護助教諭〕

課題は各学年担当者からの情報量が乏しいことだ。週に 1 回行われているがタイムリーな

情報共有が出来ていないと思う。会議中に報告を聞いていて既に知っている情報だと感じることがある。また、2時間目はそれぞれの生徒をどこに繋げていくかなどもっと具体的なことを話し合う方が有意義だと思う。

[不登校対策サポーター]

今後は生徒の為にどんな支援ができるかを委員たちの持つ情報を共有しながら、「いつ」「どこで」「だれが」「何を」「どのように」支援するのかを具体的に検討することを推進していきたい。

[各学年担当者①]

特になし

[各学年担当者②]

自分の改善点としてはもっと担任からうまく情報を得ることができるようになりたい。ただ、担任に一週間の様子を尋ねてもいつも通りですと言われるとそれ以上聞きようがないと感じてしまうことがある。また、会議全体では個別の生徒への対応策の検討がもっと中心になるといいと思う。ただ、担任だけに負担がかかる解決策にならないか心配だ。

[SSW]

もっと情報共有ができたらと思う。生徒に関する情報は、生徒と周囲の関わりをどのように繋げていくかを考えるために必要になる。また、どのように繋げていくか、具体的プロセスを立てて話していきたい。A 中学校の登校支援委員会が定期的に 2 時間分時間を確保して実施し続けているのはとても凄いと思うし、実現しているのは管理職の引き上げる力が強いからだと思う。

(考察)

各学年担当者からの情報量が少ないことを課題として挙げている委員が多く見られた。各学年担当者も自分自身の情報収集能力を課題として挙げていたが、教員全体の不登校に対する関心の薄さが情報量の少なさに関係していると思われる。

また、委員の中には以下のような発言も見られた。

(校長) 令和元年度は第 2、4 金曜の朝会で生徒指導部会と同じように登校支援委員会の内容を報道していたが、所属学年ではないため関係性がないことや変化が見えづらいことから職員の反応が芳しくなかった。生徒指導部会の報道は問題行動が学年や学校全体の荒れに繋がる意識があるため他学年であっても関心が高くなるが、登校支援に関してはそうではない。

(生徒指導主事)

不登校対策への意識が上がらないことも課題の一つだ。不登校生徒への支援は担任に火をつけづらい。10 日欠席している状態を一大事と捉え先手で取り組むことができていないと感じる。

第3節 別室について

別室をどのように感じているか。また、別室はどのような場所であってほしいと考えているか。

(1) 別室の概要

A 中学校の別室は保健室の隣の空き教室にあり、不登校対策サポーターが週 4 日常在している。一学期時点で利用している生徒は 37 名で、利用する生徒が少ない日は 6～7 名、多い日は 15～17 名程度来室している。不登校対策サポーターは熊本市から派遣されている再任用職員で令和 4 年度より A 中学校で不登校対策サポーターとして勤務している。不登校対策サポーターは通級指導教室や情緒障害学級の経験があり、特に特別支援教育への造詣が深い人物である。

(2) 別室の運営方針

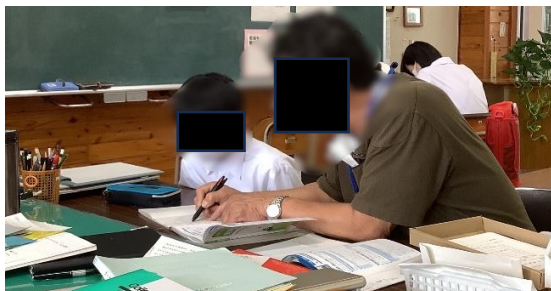
別室について不登校対策サポーターは、登校や教室で授業を受けることに不安や緊張を感じる生徒のための教室、居場所であると考えている。また、別室の利用方法については「勉強や読書、先生との会話などをしてリラックスして過ごす。基本的には、生徒それぞれにあった過ごし方で、これをしなければならないといったことはない。」と話す。そのため A 中学校の別室にはリラックスができるような音楽を流しており、教室後方部にはアサーションやソーシャルスキルに関する本やパズル、ルービックキューブなどが置かれている。生徒が来室した際には勉強だけでなく、クロスワードパズルを考えたりサポーターや友達と会話をしたり PC を使用し気持ちを整理したりして過ごすことができるよう配慮がなされている。

(3) 別室を利用する生徒について

別室をどのように利用しているのか例として 2 人を挙げる。

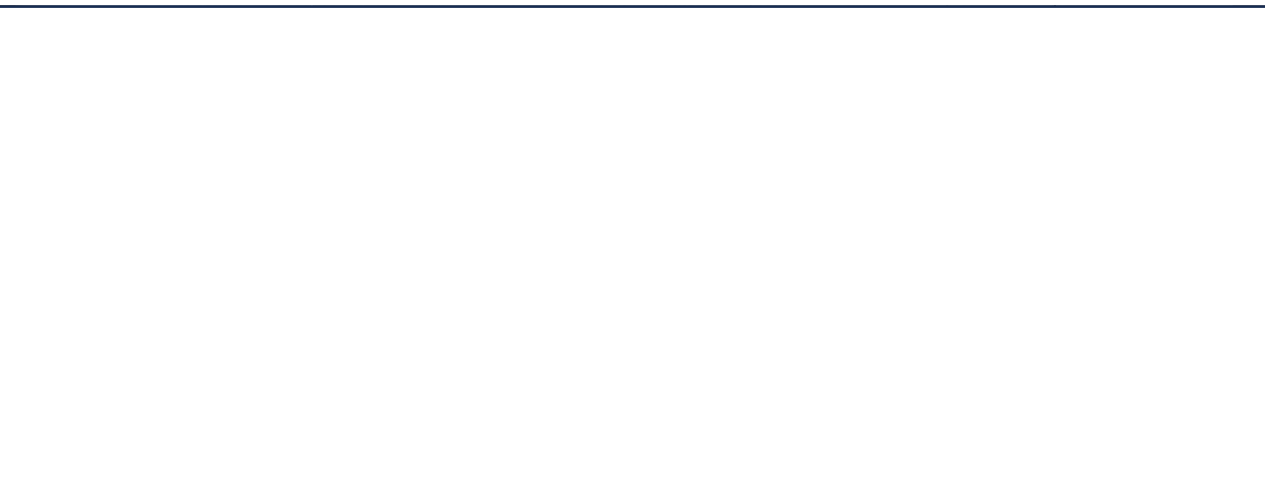
・生徒 A (1 年男)

一学期は不定期で別室を利用していたが、二学期からはほぼ毎日 2～3 時間程度別室を利用している。不登校対策サポーターを信頼しており登校時には不登校対策サポーターが別室にいることを外から確認して来室する。不登校対策サポーターや担任とは笑顔でやり取りをする姿が見られる。別室では PC を使った入力作業をよく行っており、不登校対策サポーターが新聞の切り抜きを課題として与えたり漢字の入力テストを行ったりしている。二学期は、不登校対策サポーターと数学を勉強したり別室で給食を食べたりするようになった。



・生徒 B（2 年女）

1 年次から継続してほぼ毎日別室を利用している。一学期は昼休みまで別室を利用し帰宅することが多かったが、二学期は徐々に参加できる授業には別室から通うようになった。音楽の授業に参加した際には個人のノートに以下のように感想を記入している。また、不登校対策サポーターから働きかけがあり、別室を利用する 3 年生も生徒 B に励ましの言葉を送った。



〈生徒に対して感じられたこと〉

不登校及び不登校傾向の生徒は様々なタイプがいるのだと知識としては知っていたが、別室に利用する生徒はどのような理由で教室に入りづらいと感じているのか分からなかった。実際に接してみて「勉強についていけない」、「人間関係が上手くいかない」、「教室に入るのが怖い」、「学校に行くのが億劫だ」など様々な理由があって教室で過ごすことが苦しいと感じる生徒がいることを知った。また、教室で過ごすことを苦痛に感じているということは、あまり人と関わりたくないのだろうと考えていた。しかし、昼休みになると同じクラスから友達が遊びに来て楽しそうに会話をしていたり、別室内で新しい友達を作っていたり、部活の先輩や後輩と出会うと親しげに会話をしたりする姿を見て、人間関係全てを疎ましく感じているわけではないと感じられた。

(4) 別室を利用する生徒、保護者の意見

不登校対策サポーター協力の下、9 月に別室を利用する生徒及び保護者にアンケートを実施した。（巻末資料 2）この結果、別室を利用する生徒も保護者も別室を肯定的に捉え、それぞれの居場所として感じていることが分かった。生徒からは「静かな場所で落ち着く」の他に「生徒同士の交流があること」や「（別室を利用する）みんなが優しいから」など、別室を利用する他の生徒に恐れや緊張感を感じることがなく過ごせることが理由として挙げていた。

(5) 登校支援委員会委員たちの考え

[校長]

別室はずっと居る場所ではなく、どこかで押し出していくタイミングを見て背中を押す必要がある。学校に来てくれるのは第一歩だと思うが居心地が良いからとずっといていいわけではない。別室は一度試してみて、過負荷だと感じたら負荷を下げるのが比較的容易にできる場所だから、今後は生徒に合わせた負荷をかけてほしいと思う。

〔教頭〕

別室は社会的自立に向けて集団の中に入っていくためのステップの場所だ。だからずっと別室にいるのは違うと思う。学級は一定の規律を持って存在しているが、別室の様子は規律や区別がないように感じる。ストレスなく過ごせることも大切だが、やることはきちんとやるようにしてほしい。

〔主幹教諭〕

別室は非常に曖昧な場所だと思う。ただし最悪の事態（引きこもり）を避ける、また教室へのワンクッションとしては必要な場所だ。学ぶ機会の保障のためにも学校に行くか休むかの二者択一にならないためにも別室はなくしてはいけない。（別室に終日いる生徒については）将来的に社会から引きこもってほしくないというのが一番なので最終的に自立に繋がればいいのではないかなと思う。

〔生徒指導主事〕

別室は不登校から教室に入るための 1 ステップだが、教室に入れない生徒の受け皿であるのも事実だ。本や遊び道具があるのはいいと思っているし、今の明るい雰囲気は今の不登校対策サポーターによって生まれている。ただ、現状が担任の教室へ戻ってきてほしいというニーズとずれていると思う。

「利用時間の制限について」

もし、利用時間を制限することで教室へほとんど拍子に戻れるならそうしているが実際は学校に来なくなる、または別室が解放している時間のみの登校になってしまうだろう。

〔養護助教諭〕

別室は自立のためのステップアップルームであってほしい。だから教室にいる生徒と同じように学習をきちんとしてほしい。例えば読書やパズルは休み時間のみ、利用時間を午前中のみに限定するなど教室を拠点として別室を休憩場所として利用する形に変えるのも一つの手だと思う。

「別室に終日利用する生徒について」

ただ学校に来るのが目的なら別室でいいけれど、その先の進路のことを考えるならもう少し押し出す必要がある。

〔各学年担当者①〕

別室は自分のペースで過ごすことができる生徒にはプラスの場所だ。しかし、困ったことから避難するために簡単に別室利用を選択してしまう生徒もいる。困った時こそ状況を変えようと努力し、その中で人との関わりを学ぶチャンスがあるはずなのに（回避してしまう）。担任としては別室がなくても教室で過ごせるようにしたいが、最後の砦として利用を勧め

たい。

「別室への希望など」

本人と保護者と担任の考える最終目標が違うことがある。担任としてはもう少し押し出したいが担任からの働きかけでは難しいとジレンマを抱えていることもある。こういったときに不登校対策サポーターが本人に対して頑張ってみてはどうかと背中を押すスタンスでサポートしてもらえると保護者、生徒と担任の溝が少し埋まると思う。

〔各学年担当者②〕

別室は教室に入れない生徒の受け皿として機能している。専門性の高い先生（不登校対策サポーター）がいつもいてくれるのは生徒にとって良いと思うし、自分たちも毎日交代で見ると手は足りないのが助かる。別室をよく利用する生徒には不登校対策サポーターが中心となって関わり、同様に担任や周囲が関わりを持つことができたらいと思う。

〔SSW〕

別室は勉強する場所だけではなく、第三の居場所として機能している。個人的にはステップアップというよりは居場所としての役割が強いと感じる。A中学校の不登校対策サポーターの押し付けない関わり方はとても良いと思う。他の学校にも別室や不登校対策サポーターが配置されていることがあるが、指導的な関わりをしていないこともある。その場合、別室にいる生徒は作れるかもしれないが何も変化しない。

（考察）

別室の現状に対しては肯定的な意見もある一方で現状から大きく変えるべきという意見やもっと教室へ押し出すべきという意見も見られた。これは別室を、先に進むために一時的に利用するスペースか居場所として捉えているかの違いにあると考える。前者は教室復帰、高校への進学意識が強く、希望する進学先に合格するために必要な学力をつけること、進学後も他の生徒と同様に授業を受けて高校に通いつづけることができるように集団生活に慣れる必要があることを理由として挙げている。後者は生徒の心身の安定や自己決定を重視する傾向にあり、教室や授業への声掛けは行いが、最終的な決定は本人に任せる現在の別室のあり方を支持している。

第4章 まとめ

第1節 登校支援委員会委員たちへのインタビュー結果

【社会的自立】

学校復帰や教室復帰の先に将来的な社会的自立がある	9名中5名
将来的な社会的自立へ繋げる方法は学校復帰や教室復帰に限らない	9名中4名

【登校支援委員会の課題点】複数回答有

各学年担当者からの情報量が乏しいこと	9名中7名
具体的な支援方法の検討に至っていないこと	9名中3名

【別室とは】

別室は一時的に利用するスペースである	9名中4名
別室は居場所の一つである	9名中3名
どちらとも言えない	9名中2名

【別室の運営方針】

このままの方針で続けてほしい	9名中6名
運営方針を変えた方がよい	9名中3名

上記が登校支援委員会委員たちへのインタビューの結果をまとめたものである。現状として、委員たちの社会的自立の捉え方や不登校生徒の支援の方向性は異なっていると考えられる。

第2節 実践研究全体のまとめ

登校支援委員会委員たちにはこれまでの経験や現在の役割から生まれた不登校生徒への支援に対する考えや思いがあり、それぞれの委員たちの不登校生徒に対する考え方や支援の方向性は異なっていることが明らかになった。それぞれの委員たちの考え方が異なることによって、会議内で先に発言した委員と異なる意見を持つ委員が発言しづらいと感じ、「話しても分かってもらえない。」「きっとあの人はこう考えているから対立してしまうだけだろう。」と話し合うことを諦めてしまう姿が見られた。それぞれの考えを統一することは難しいが、お互いに意見を交わそうとしなくなることで、登校支援委員会の目的の一つである不登校生徒へのより良い支援方法の提案や決定に対して消極的になってしまうと考えられる。以上のことから、登校支援委員会は不登校生徒への対応の検討だけでなく、会議内でそれぞれの委員たちの不登校生徒への支援に対する考え方や思いを話し合い、よりお互いを理解し合うことのできる時間を設ける必要があると感じられた。

【注】

- (1)文部科学省 (2023)「令和 4 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」 p.65、p.69
- (2) 同上 p.80
- (3)文部科学省(2021)「令和 2 年度不登校児童生徒の実態把握に関する調査報告書」p.9~p.11
- (4) 文部科学省 (2023)「令和 2 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果概要」 p.17
- (5)滝川一廣 (2005)「不登校理解の基礎」、臨床心理学第 5 巻第 1 号、p.15~p.21
- (6)文部科学省 (2019)「不登校児童生徒への支援の在り方について (通知)」
- (7)文部科学省 (2023)「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策 (COCOLO プラン)」 p.5、p.6
- (8)熊本市ホームページ (2023) 不登校児童生徒の支援について
https://www.city.kumamoto.jp/hpkiji/pub/detail.aspx?c_id=5&id=43800 (2023 年 11 月 20 日閲覧)
- (9)忠井俊明・本間友巳 (2006)『不登校・引きこもりと居場所』、ミネルヴァ書房、p.7~p.8

あとがき

不登校について研究したいと感じるようになった要因は、A 中学校の生徒指導上の課題が不登校であるということだけでなく、自分自身が高校生の時に学校に行くことが辛いと感じている時期があったからです。一年目は別室に来室する生徒と関わりを持つことを中心としていましたが、その中で登校支援委員会に興味を持ち、二年目からは会議にも参加させていただきました。会議に参加させていただく中で A 中学校の登校支援委員会は他の中学校にはない不登校生徒について考える場であり、この中学校が不登校生徒に対して高い意識を持って支援を継続されていることが分かりました。

また、インタビュー調査では委員の方々に快く引き受けていただき、熱心に自分の思いや考え方を形成するに至った経緯や背景をお話していただきました。こうした姿から委員の方々が日々様々な悩みや葛藤を抱えながらも生徒に寄り添われていると感じました。

熊本教職大学院に入学した当初は、卒業後担任として不登校や別室登校の生徒とうまく関わるができるのか、適切な方法が分からず不安を感じていましたが、この研究を通して様々なことを学び、不登校生徒の支援に関して前向きに捉えられるようになりました。また、不登校生徒や別室登校への理解が深まり、改めて居場所づくりが必要だと感じました。私も今後このような会議に参加する機会があれば、自分の考えを持ち、周りの方々と話し合いながらより良い支援ができるように努力していきたいです。

最後に、本研究を進めるにあたり研究の方法や視点について熱心にご指導いただきました藤中隆久教授、濱平清志シニア教授、塩津昭弘シニア教授に心より感謝申し上げます。

そして、本研究へのご理解とご協力いただきました校長先生をはじめとする A 中学校の先生方に厚く御礼申し上げます。

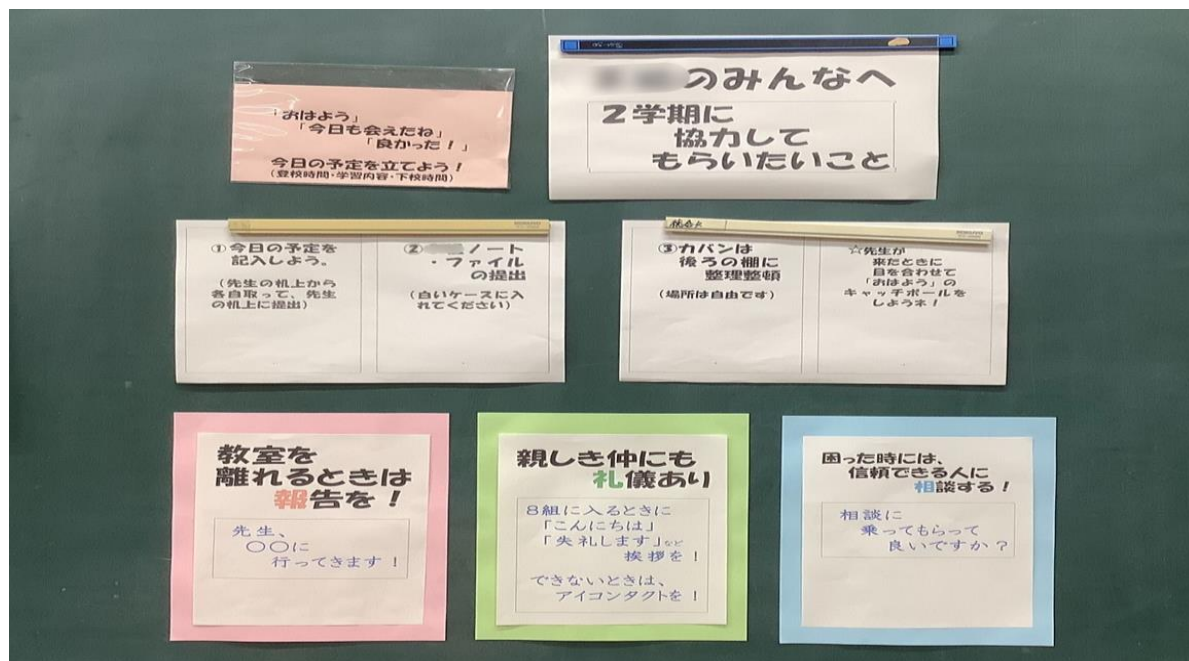
巻末資料 1 別室の写真

〔写真 1〕 別室の全体写真



〔写真 2〕 別室内のルール

2 学期以降別室前方にルールが示されるようになった。生徒たちは不登校対策サポーター不在時も来室時の流れ（写真中段）を確認しながら行動するようになった。



〔写真3〕 昼休みの様子

別室を終日利用する生徒だけでなく、昼休み時には顔を見せる生徒が不登校対策サポーターと話をしたり学級担任（写真右前方）が来室し生徒とギターを演奏したりと賑やかな様子を見せる。



〔写真4〕 授業時の様子

授業が実施されている時間は、別室を利用する生徒も勉強に取り組むことが多い。写真のような形で不登校対策サポーター（写真中央）が隣に座り学習をサポートする場合や友達と勉強する場合もある。



巻末資料2 アンケート結果

別室を利用する生徒及び保護者に別室に関するアンケートを不登校対策サポーター協力の
下、2023年9月に実施した。生徒26名、保護者18名から回答を得られた。以下アンケート
結果を示す。なお、☆は最も多い回答である。

〔質問項目〕

- ①あなたにとって別室はどんな場所ですか？
- ②どうしてそう思いますか。
- ③その他（別室に対する要望など）

〔生徒〕

- ①あなたにとって別室はどんな場所ですか？

☆落ち着ける場所（14名）

- ・安心して通える場所。心が落ち着く場所
- ・自分の心の整理が出来て落ち着く場所

（その他）

- ・2つ目の教室
- ・自分の居場所になるようなところ
- ・病室のような場所
- ・いい意味でみんなが放っておいてくれる場所

- ②どうしてそう思いますか。

☆静かだから（10名）

- ・静かに勉強ができるから。
- ・静かでみんなが優しいから。他の学年の子とも交流できて楽しい。別室にいる友達といろんなことを乗り越えてきてから、1人じゃないと感じられる。

（その他）

- ・自分のペースで登校でき、勉強も先生や友達と楽しくできるから
- ・みんなが親切で、自分が気を重くせずに人に頼れる場所だから
- ・自分らしくしていてもみんなが嫌な反応ひとつせず優しくしてくれるから
- ・圧迫感がない、気が楽、敏感になりにくい

- ③その他（別室に対する要望など）

- ・もう少しだけ教室が広かったら嬉しい
- ・色々自分で分かっているので、これをしなさいなど強く言わないでほしい
- ・（先生たちには）「授業に行け」とあまり強く言わないでほしい

〔保護者〕

①あなたのお子さんにとって、別室はどんな場所だと思いますか？

安心できる場所（10名）

- ・安心できる場所。自分の意見を言える（聞いてもらえる）場所
- ・気分が優れない時等も、本人が安心して登校できる場所。クールダウンし、現状把握できる場所

（その他）

- ・過ごしやすい居場所であり、A 中学校での授業、行事など友達、先生方との関わりを繋ぐ場所
- ・絶対に拒絶されない居場所、息ができる場所
- ・時間の使い方を学ぶ場所

②どうしてそう思われますか。（重複有）

☆子どもから友達や学校のことを聞くようになった（10名）

- ・別室に行ったときは「今日は〇〇をしたよ」と楽しそうに話してくれるから
毎日気が重い中、平日は登校していますが、夏休みは予定がない限り自ら朝準備して登校していたから
- ・別室の先生の事など楽しそうに聞かせてくれるから

☆登校しやすいから（9名）

- ・朝はいつも緊張が大きいですが別室には登校しやすいから。また、別室にいる時の先生方との関わりを子から聞いて
- ・教室に行けない日も別室なら行けるという日がたくさんあったから
- ・学校に行きたくないということがなくなり1年の時より勉強に集中できているから

③その他（別室に対する要望など）

- ・これからも生徒のみなさんがまた行きたいと思えるような雰囲気づくりをしてほしい
- ・自分なりに教室に行けるように頑張り、受ける授業も増えてきたので、暖かく見守ってほしい
- ・本人の特性を理解したうえで別室の先生と担任には連携して対応してほしい
- ・クラスに行くのが絶対ではないけど、できそうな時は挑戦させてほしい
- ・行事への参加に向けて同学年の生徒と関係性を構築する機会を作ってほしい